

明治の終焉

桂内閣が韓国併合を策して準備をしていた明治四十二年、政府を根底から衝動させる事件が起こった。

いわゆる大逆事件である。長野県の宮下太吉が、天皇暗殺を計画して爆弾を製造していた事実が警察に探知され、共謀者などが検挙され更に幸徳秋水や内妻の菅野すけも逮捕される。この社会主義者・無政府主義者など全国で逮捕された。

一方、この事件は天皇制によって自己を保身してきた藩閥官僚にとっても衝撃的な事件であり、桂内閣にとつても政策の転換を迫られる事件であった。

桂内閣は政友会との提携を図り、遂に政友会総裁の西園寺に次期政権を譲り、所謂、妥協以上の妥協をして、藩閥官僚の時代が終焉した。

「我々青年を囲む空気は、いまや少しも流動しなくなつた。強権の勢力は普く国内に行き渡っている。現代社会はその隅々まで発達している。

その制度の有する欠陥は日一日と明白になつてゐる。戦争とか豊作とか飢饉とか総て偶然の出来事の発生するのだから振興の見込みもない、一般経済界の状態は何を語るか、財産と共に道徳心を失つた貧民と賣淫婦との急激な増加は何を語るか」とは、若い「石川啄木」の言である。

明治天皇の崩御は、明治国家の終焉と共に次代へと大きく、転換す

るのであつた。

容態の悪化を知らされた国民は、二重橋の前で、天皇の平癒を祈願した。

